山木兼隆の位牌戻る

国学院大から遺族へ

没後200年 鎌倉末期の製作か

八巻家に残る位牌を持つ、兼隆の子孫の八巻同族会初代会長である八巻富雄さんの一人っ子布施京子さん(左)と次女の和美さん＝東京の国学院大メディアセンター

今から840年前の三嶋明神（大社）祭礼の夜、多くの手兵が祭りに出掛けていた隙を突き、伊豆韮山の蛭ケ小島に流罪の身だった源頼朝は源氏再興を願って挙兵し、その手初めの戦で、同所山木の山木判官平兼隆の館を攻めた。この夜襲で兼隆は亡くなり、一族郎党は伊豆を後にして各地に逃れたとされるが、兼隆が亡くなってからおよそ200年後に作られたという位牌がさきごろ、40余年ぶりに遺族の元に戻った。50年前、国学院大教授だった樋口清之さん（1909～97年）が「兼隆の位牌に間違いない」と鑑定した後、行方知れずとなっていた。

（文、写真　特別編集委員・森野宏尚）

特集 熱視線

位牌は樋口教授に鑑定を依頼した嫡流で所有者の元指圧師・八巻富雄さん（1982年、71歳で没）＝当時、東京都在住＝の1人娘である布施京子さん(57)＝さいたま市＝、山木判官平兼隆を始祖とする一族が発足した八巻同族会（八巻剛正会長）が国学院大に対し「樋口元教授に預けたままになっており、大学にあるはず」と探索を要請。樋口教授は97年に亡くなり、行方が分からなくなっていた。

大学側で探したところ、さきごろ「見つかった」との連絡が入り、布施さんと次女の和美さん（24）、八巻同族会6代目会長の八巻剛正さん(81)＝埼玉県熊谷市＝、山木兼隆研究会代表の八巻正和さん(73)＝秦野市＝らが引き取りに東京都渋谷区の国学院大を訪ねた。位牌を樋口教授に寄託したのは鑑定から9年後、八巻富雄さんが亡くなる1年前の1981（昭和56）年で、41年ぶりに家族に返却された。

位牌を受け取った布施さんは「感無量。父から樋口先生に預けたと聞いていたが、父も先生も亡くなり半分諦めていた。しかし大学側がきちんと調べて探してくれ、とんとん拍子で戻ってきた。とてもありがたい」。また「本当は位牌は三つあり、金の位牌は山の寺（山梨県内の菩提寺）に預けておいたら泥棒が入り盗難に遭った。主人とも相談し、これまで通りわが家で守っていくことにした」と話した。

八巻同族会の八巻会長は「兼隆の関係のものは何一つ残っておらず、位牌は唯一のもので、ご遺族の元に戻り大変喜ばしい。国学院大の先生方には大変世話になった」と感謝の言葉を述べた。

位牌は高さ40センチほどと通常より大きめの細長いもので、高さ30センチ・幅20センチほどの幅広の漆塗りの2点。細長いものには戒名か「一乗（條）寺殿義岳宗心大禅定門」「治承四年八月初七日」とあり、治承は平安時代の年号で治承四年は1180年。頼朝が挙兵、兼隆が亡くなった年である。裏面には何も書かれていない。

漆塗りのものは裏に「天明四年丑十二月　八巻帳三郎　甲州巨摩郡穴平村」「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」

今から600年ほど前、鎌倉時代末期に作られたとみられる山木判官兼隆の位牌。「一乗(條)寺殿義岳宗心大禅定門」「治承四年八月初七日」と記されるという

治承四年八月初七日」。天明四年は江戸時代中期の1784年で、表に当時から数代前の故人の戒名が複数書かれている。

「伊豆國…」の一文は八巻富雄さんの新聞寄稿、八巻俊雄さんの著作とともに細長い位牌裏に書かれている―とあるが、漆塗りの位牌裏に残り勘違いとみられる。

故樋口教授が本物と鑑定

八巻同族会 発足50周年を前に

兼隆の位牌の所有者、八巻富雄さんの生家は山梨県江草村字八巻（現北杜市）。「古里の家に古い位牌があり、そこに伊豆の何とか、平の何とかと書いてあった。私が二十歳になったばかりの頃、仏壇から位牌を取り出して読み、自分の先祖は平氏で、伊豆の方から来たのだなと考えたことを思い出した」（八巻さん寄稿、1974年6月13日付の日本経済新聞）。

この頃、NHKの大河ドラマで永井路子さんの「北条政子」を原作とした「草燃える」を放映していて「山木判官兼隆がしばしば出てきた。ヤマキは私の姓と同じ発音だし、伊豆の国にいて平氏の一族だという」「山木判官のことを調べるためも、国学院大の樋口教授原作の『北条政子』を読み、吉川英治さんの『新平家物語』、遠藤周作さんの『埋もれた古城』などを探し出し、山木判官が北条氏と並ぶ東国の平氏の名門であることが分かり、何となく血の騒ぐ思いがした」（同）。

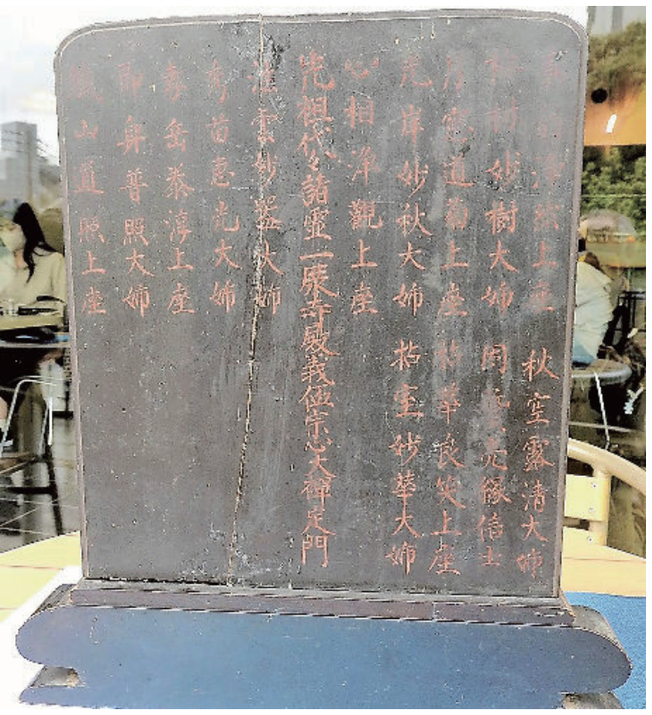
八巻さんの寄稿や、八巻同族会3代目会長で元東京経済大教授の八巻俊雄さん（山梨県内の生家が隣同士）の著作『八巻一族八百年の歴史』によれば、富雄さんは山梨に帰省した際に位牌を確認すると二つあり、「きちんと鑑定してもらいたい」と、その道の権威者を訪ねることにした。最初に東京大へ行ったところ、国学院大の樋口教授を紹介された。

72（昭和47）年1月に鑑定依頼し、樋口教授は「山木判官兼隆と八巻判官兼高の字の違いは、源氏から身を隠す都合上あて字を使った可能性があり、間違いなく本物。伊豆で討たれた山木一族が四散し、一部が山梨県に隠棲してから子孫が作ったのだろう」

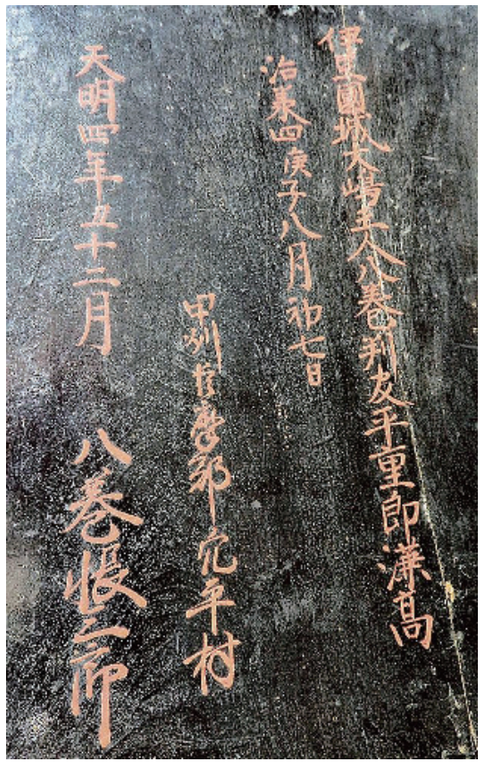
続けて「位牌の形と戒名が武家特有で、禅宗系の体裁を整え、兼隆没後200年ほどたった頃（鎌倉末期）に作られたとみられ、源氏の勢力が払拭され、八巻家が安定を取り戻したことを示すもの」と根拠を示した。

樋口教授は同時に名門の子孫であり、同族会を作ることを提案した。これを受け富雄さんは図書館に通い、まず電話帳で八巻姓を調べた。すると東京351人、宮城県322人、福島県202人、神奈川県151人、山梨県129人などが見つかり、大部分は伊豆より北だった。このほか山木、失巻、八牧と書くヤマキもいた。八巻が大多数、山木はその半数強、失巻と八牧は少数。

約1400人に同族会発足の手紙を出し、74（昭和49）年5月に東京で設立総会を開催、前記場所に加え静岡なども含め65人が出席した。八巻同族会は兼隆が亡くなった伊豆の国市山木や菩提寺の香山寺を年に一度訪ね、供養している。来年で発足50年の節目となる。



作製した時代に作られたとみられる漆塗りの位牌の表側。江戸時代以前の故人の戒名が記される。



「伊豆國城大嶋主人八巻判官平重郎兼高」などと読み取れる江戸時代の漆塗りの位牌裏

頼朝挙兵 最初の標的 山木判官と号した兼隆

山木兼隆は伊勢平氏の血筋を引く平家の武将、和泉守などを務めた平信兼の子。京で検非違使をしていたが、父との不和（理由不明）で1179（治承3）年1月、伊豆国山木郷に配流された。

だが検非違使時代の別当・平時忠が伊豆知行国主になり、伊豆目代に任じられた。兼隆は「山木判官」と称され、伊豆国衙を支配下に置き伊豆で勢力を広げた。「平家物語」「曽我物語」による

と、伊豆の豪族・北条時政が娘の政子（源頼朝と結婚）と兼隆の縁談を進めたとされるが、これは創作―が近年の通説だ。

80（治承4）年8月17日の山木館夜襲に頼朝は参加せず、時政の軍勢が館を襲ったがなかなか落ちず、頼朝の警護で北条館（守山の麓）に残った加藤景廉らが加勢、兼隆の首を取ったとされる。

北条館と山木館は直線距離で3キロ弱。当時の狩野川は今よりも東側を流れ、大水のたびに流れを変えて湿地も多かった。頼朝が配流されていた本来の蛭ケ小島(公園)は、現在地よりも下流域だったといわれる。

山木館は香山寺（臨済宗建長寺派）近辺にあったとみられ、同寺の略史によれば兼隆が創建したとされる。境内には八巻同族会によって建立された兼隆の供養塔がある。近くの山木皇大神社には兼隆神社が明治初め合祀され、祭られている。